

平成28年度 茅ヶ崎市 一般会計等財務書類

現在の地方公共団体の会計制度は、その年にどのような収入があり、それをどのように使ったかといった現金の動きがわかりやすい「現金主義会計」が採用されています。

その反面、市が整備してきた資産や借入金などの負債といったストック情報、行政サービス提供のために発生したコスト情報の不足といった弱点があります。

そこで、財務書類4表（貸借対照表、行政コスト計算書、純資産変動計算書、資金収支計算書）を作成していました。本市では、平成27年度決算までは総務省方式改訂モデルに基づいて作成していましたが、平成28年度分から総務省の要請により、統一的な基準による財務書類を作成することとなりました。

財務書類の作成基準の主な変更点は、①複式簿記の採用、②固定資産台帳の整備、③統一的な基準による財務書類の作成であり、今後は全国の地方公共団体との比較も容易になります。

対象とする会計：一般会計、公共用地先行取得事業特別会計

一般会計等財務書類は、地方財政統計上統一的に用いられる「普通会計」を対象としています。

本市の「普通会計」は、地方公共団体の行政運営の基本的な経費を網羅した「一般会計」に、公共用地を先行取得するために設けられた「公共用地先行取得事業特別会計」を加え、以下を控除した会計です。

- ・「一般会計」及び「公共用地先行取得事業特別会計」の両会計間で重複する経費
- ・在宅介護支援センターなどの建設に要した経費を経理する「介護サービス事業」の経費

貸借対照表

「貸借対照表」とは、市民のみなさまが利用する市の施設(財産)、市の所有する現金や債権、資産形成のために投資された資金などが、どのくらいあるのかを示したもので、資産・負債・純資産の三つの要素から構成されています。

左右の合計額が等しいこと、現時点の資産と負債などの残高(=バランス)を示していることからバランスシートとも呼ばれます。

+歳計外現金 2億円			
資産	2,066億円	負債	650億円
市が所有している財産の内容と金額です。行政サービスの提供能力を表しています。		借入金(市債)や将来の職員の退職金など、将来世代の負担で返済していく債務です。前年度から約21億円増加しています。	
【内訳】		純資産	1,416億円
有形固定資産	1,908億円	現在までの世代が既に負担して、支払いが済んでいる正味の資産です。市の資産全体68.5を占めています。	
道路、公園、学校、庁舎など			
無形固定資産	1億円		
ソフトウェアなど			
投資等	82億円		
基金、出資金、長期延滞債権など			
流動資産	75億円		
現金・預金、財政調整基金、市税未収金など			
うち現金	30億円		
計	2,066億円	計	2,066億円

一般会計等財務書類からこんなことが分かります。

- 市民一人当たりの資産は85万7千円
- 市民一人当たりの負債は27万円
- 市民一人当たりへの行政サービスの提供は25万1千円
- 次年度へ繰越した財源は30億円

資金収支計算書

1年間の市の現金の収入(歳入)と支出(歳出)が、どのような理由で増減しているかを、性質別に区分して整理したものが「資金収支計算書」です。

経常的収支の黒字分を、大きな資金が必要となる資産整備やそのための借入金の返済に充てています。財務書類4表のうち、唯一現金主義により作成しています。

期首(27年度末)資金残高 28億円

当期収支	△0.7億円
【内訳】	
業務活動収支	28億円
投資活動収支	△49億円
財務活動収支	21億円

期末(28年度末)資金残高 28億円

純資産変動計算書

市の純資産(正味の資産)が、平成28年度中にどのように増減したかを示します。平成28年度の茅ヶ崎市の純資産は、約22億円増加しています。

期首(27年度末)純資産残高 1,394億円

当期変動額	+22億円
【内訳】	
純経常行政コスト	△582億円
財源の調達	601億円
その他	3億円

期末(28年度末)純資産残高 1,416億円

行政コスト計算書

市の行政活動は、福祉や教育分野での人的サービスや給付サービスの提供など、資産形成につながらない行政サービスが大きな比重を占めています。

そのためのコスト(原価・費用)がいくらかかっているかを整理したものが「行政コスト計算書」です。平成28年度の茅ヶ崎市の1年間のコスト総額は605億円で、市民一人当たりでは25万1千円です。

経常費用(A) 605億円

【内訳】	
人件費	143億円
職員の給与・退職手当など	
物件費	135億円
物品購入、光熱水費、施設などの修繕費、減価償却費など	
その他のコスト	7億円
地方債の利子など	
移転費用	320億円
生活保護などの社会保障給付、各種団体への補助金、繰出金など	

経常収益(B) 23億円

行政サービスの利用で市民のみなさまが直接負担する施設使用料や手数料などです。

純経常行政コスト 582億円

(A) - (B)
経常行政コストから経常収益を差し引いた純粋な行政コストです。

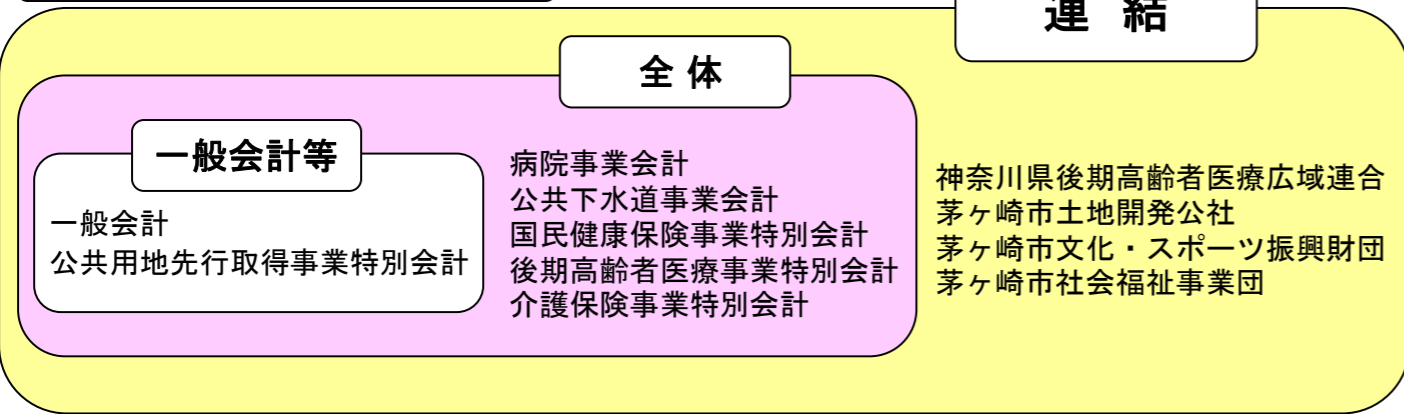
平成28年度 茅ヶ崎市の連結財務書類

市では一般会計で行っている事業のほかにも、病院事業や公共下水道事業、国民健康保険事業など、市民のみならずと密接な関わりをもつ事業を行っています。

また、こうした市自らが行う事業とは別に、公益法人などの関係団体を通じて行う事業もあります。このように、市の財政は一般会計のみで成り立っているのではないため、真の茅ヶ崎市全体のストック情報やコスト情報を分析するためには、一般会計や特別会計に加え、公営企業会計及び市が一定割合以上を出資している関係法人等までを対象とした連結財務書類を用います。

なお、連結に際し、一般会計から連結対象の会計・法人への出資金・繰出金等や連結会計間におけるサービスの提供／供給などは、連結グループ内での内部取引として相殺消去しています。

茅ヶ崎市の連結範囲



連結貸借対照表

連結対象の各会計・団体・法人をひとつの行政サービス実施体とみなして、茅ヶ崎市全体の資産や負債のストック情報を網羅した財務書類が、「連結貸借対照表」です。

資産	3,000億円	負債	1,347億円
連結ベースでの市の所有財産の内容と金額です。		連結することにより、病院事業や公共下水道事業での借入金などが加わっています。	
【内訳】		前年度から約16億円増加しています。	
有形固定資産	2,744億円	純資産	1,653億円
道路、公園、学校、庁舎、病院、下水道など		現在までの世代が既に負担して、支払いが済んでいる正味の資産です。	
無形固定資産	31億円	連結ベースでの市の資産全体の55.1%を占めています。	
ソフトウェアなど			
投資等	47億円		
基金、出資金、長期延滞債権など			
流動資産	178億円		
財政調整基金、市税等の未収金など			
うち現金(現金・預金)	108億円		
計	3,000億円	計	3,000億円

連結財務書類と一般会計等財務書類を比較すると…

- 市民一人当たりの資産は124万5千円(一般会計等は85万7千円)
- 市民一人当たりの負債は 55万9千円(一般会計等は27万円)

連結資金収支計算書

一般会計等の「資金収支計算書」の考え方を連結対象の特別会計や法人などにも適用し、連結グループの収支の実態を表すのが「連結資金収支計算書」です。現金主義により作成するため、病院事業などの発生主義を採用している会計・法人等は、取引事実の発生を根拠とした金額ではなく、会計年度内に実際に収入・支出が行われた現金の額へ決算書類の組み替えを行っています。

期首(27年度末)資金残高	108億円
当期収支	△2億円
【内訳】	
業務活動収支	57億円
投資活動収支	△71億円
財務活動収支	12億円
期末(28年度末)資金残高	106億円

連結純資産変動計算書

連結ベースでの市の純資産(正味の資産)が、平成28年度中にどのように増減したかを示します。平成28年度の茅ヶ崎市の純資産は、約25億円増加しています。

期首(27年度末)純資産残高	1,628億円
当期変動額	25億円
【内訳】	
純行政コスト	△1,040億円
財源の調達	1,060億円
その他	5億円
期末(28年度末)純資産残高	1,653億円

連結行政コスト計算書

一般会計等の「行政コスト計算書」の考え方を連結対象の特別会計や法人などにも適用し、ひとつの行政サービス実施体とみなして作成したのが「連結行政コスト計算書」です。国民健康保険や介護保険など、市が行う福祉目的事業の中には特別会計で行われるものも多いため、「行政コスト計算書」と比較して、社会保障給付など移転費用の割合が高くなっています。また、経常収益が「行政コスト計算書」と比較して大きくなっているのは、企業会計や特別会計が原則受益者の負担で賄われるべきものだからです。

経常行政コスト(A)	1,333億円
【内訳】	
人件費	204億円
職員の給与・退職手当など	
物件費	235億円
物品購入、光熱水費、施設などの修繕費、減価償却費など	
その他のコスト	32億円
地方債の利子など	
移転費用	862億円
国民健康保険事業や介護保険事業などでの社会保障給付、各種団体への	

経常収益(B)	293億円
使用料・手数料などに加え、市立病院で支払う医療費、国民健康保険料、介護保険料なども含まれます。	

純経常行政コスト(A)-(B)	1,040億円
経常行政コストから経常収益を差し引いた純粋な行政コストです。	